



# 牧神の午後

初版発行

一九六五年 五月二五日

二四版発行

一九七〇年十一月二五日

著者との話合いにより検印省略

定価五五〇円

著者◎ 北 杜 夫

発行者 高橋 直良

発行所 冬 樹 社

東京都千代田区神田神保町二ノ一八  
振替口座東京七七五七七番

印刷所 稲葉印刷株式会社  
製本所 一重製本株式会社

牧神の午後  
北 杜夫

冬樹社



牧神の午後　もくじ

狂詩	7
パンドラの匣	87
牧神の午後	113
硫黄泉	151
病気についての童話	175
誕生	213

装幀　北村　脩



# 牧神の午後



# 狂詩



私はこの一冊のノートにいくらかの文字を書きつけるつもりだが、それも飽ふかぎり急がねばなるまい。私は現在二十一才だが、私に残されてゐる時間はごくわずかのやうな気がする。もとより私はそれほど早く死ぬことはあるまい。ただ私の頭脳が役に立たなくなり、ここに記す文章にしても他人にはなんのことやら判読できなくなるのではないかと危懼するのである。無意味な文字の羅列、あるひは古代の象形文字のごとき不可解な筆跡、幸か不幸か私はそれをよく知つてゐるのだ。

おそらく後になつてこれを讀む医師が、いくらかでも私のことを理解できるやうに私はこの手記を書かうとするのか。それともなにか更に深い欲求があるのであらうか。いづれにせよ、私は一刻も早くこの仕事を終りに近づきたい。さうしたなら現在私を蝕んでゐるどうしやうもないこの不安、発作的に襲つてくるこの恐怖からいくぶんでも解放されるやうな気がするのである。

私はいま、幼児のごとき眠りが欲しい。白痴のやうな安息にこがれる。口渴に悩む砂漠の旅行者にもまして私はそれらをあがき求める。だが、この空白のノートのせめて半分を、まづ文字で埋めることが先決であらう。

たとへば幼少の時代。あの薄明に包まれた世界にはたしかに何かがありさうだ。うすい皮膚をとほして私にしのび入り、私の五感を歪めていつたものがありさうである。

嗅覚にしても私は生れつき人一倍鋭敏らしかつた。現に私は今もきしるペン先の金属の匂ひ、インクの匂ひを感じるが、少年にもなりきらなかつた私の周囲を、さまざまな匂ひがとりかこんでゐたことを憶ひだすことができる。裏庭の隅に低い梨の木があり、毎年いくつかの小さな実をつけた。食べられるほどのものではなかつたから誰も手をつけぬ梨の実は、そのまま腐れかかつたり、地面に落ちて長いこと転つたままになつてゐる。さうす

ると、オホハナムグリと呼ばれる金龜虫の一種がやってきて、皮に穴をあけ白い肉を掘つて汁をすするのであった。幼い私が樹の下に足を投げだして、そのさまを眺めてゐると、饅えた果肉の匂ひが鼻をついてきた。果肉に頭をさし入れむさぼり吸つてゐるハナムグリを長いこと見てゐるうちに私は自分がその甲虫になり、たちこめる饅えた甘ずっぱい香に全身がむずむずするのを感じだすのだつた。

一人、私の嫌ひな叔母がゐた。閑さへあれば長い髪をほぐして鏡の前でブラシをかけてゐたが、おそらく彼女は自分の髪のを大事にするあまり、その齒には一度もブラシをかけたことがなかつたにちがひない。彼女は汚ない齒と口臭をもつてゐた。梨の実が風雨にさらされ日にてらされ、しなびて乾からびてしまつたやうな臭ひである。そのうへ彼女の顔はむくんでふやけたやうに弾力がなかつた。あるとき彼女は大きな苺を皿にもり私にもすすめたが、私が首をふると、自分一人食べはじめた。その大写しされたやうな顔がすぐ目の前でうごき、大きく開けた口のなかへ鮮紅色の苺が次々に消えてゆくのを見てゐると、私は嫌悪といふよりも恐怖を覚えた。かなり後になるまで、私は苺には動物と同じく血液があるのだと思ひこんでゐたのである。

同じころ、夏に連れて行かれた山奥の森の中で、ヒグラシの仔が蟬になるのを見た。薄

暗い雨になりさうな気配だったから、その蟬の仔も夜がくるのだと錯覚したのかも知れない。私の見てゐる前で、苔むした太い樹の幹に這ひのぼり、そこで殻からぬけだした。あのやうに妖気じみたほの白さがまたとあるだらうか。その際どく脆い色合が殊さら私を魅したので、それ以来私は夏になると同じ光景を求め探した。

私の生れた家は、やがて東京市に編入された場所とはいへ、当時附近には水田や畠が普通に見られたくらゐで、榎や檜の沢山生えたかなり広い裏庭があつた。夕闇がおとづれ、ユスリ蚊の群が樹陰にむらがつてくるころ、蟬の終齡幼虫は地上にはじめて姿をあらはしてくる。

腺病質気味に育つた私はもとより臆病で、夜など一人で外を歩けなかつたのだが、それでも私は薄闇に目をこらし、かがみながら太い榎の根本々々を見てまはつた。脱殻はそここの幹にいくらも見つかるが、また蟬の脱けでゐない幼虫を捕へることは容易ではなかつた。たまに静かに幹を這ひ登つてゆく姿を見つけると、私の心は歓喜と奇妙な戦慄にぎくりとしめつけられるのだつた。気がつくと、すでに闇があたりをつつみ、樹々は化物のやうに私をとりかこんでゐる。榎の枝にぶつかりながら金亀虫が不気味な唸り声を立て、蚊や蟻子が幾匹もふくらはぎに喰ひついてゐる。そのたびに私は無性な恐怖にから

れ、藪越しに明るく灯のともった母屋へと一散に逃げかへつたものである。

部屋の中に捕へてきた蟬の仔を放して暗くしておく、彼らはかさこそ障子をよちて行き、適当な時刻に背が割れて、みづみづしい若蟬が生れてくる。それが大方真夜中であつた。それまで私は我慢づよく起きてゐた。眠つたとしても、夜半に何遍となく目ざめる私は、そのたびに電灯をつけて彼等の様子を窺つた。それにしても、殻の中からはじめて出てくる若蟬のいろを、なんと形容したらよいらうか。茶褐色のアブラゼミも生れたばかりには純白であつた。しつとりと濡れた魅するやうな純白であつた。上半身が殻から脱けると、このやはらかな生き物は仰向けにそりかへる。身体の重みで下半身を殻から離し、しづかに起きなほつて、ほの白い全裸の姿で殻にしがみつく。その動作を、私は目をこらして眺めてゐた。まばたきもせず、何もかも打忘れ、あたかも魂を抜かれたやうに。

一体かうしたことは子供の世界に有りがちなことにちがひない。しかしながら、当時のさうした精神状態を、私は一概に簡単に片づけてしまふ気がしないのである。それは、せつないほどの緊張であつた。常軌を逸した熱中であつた。なんらかの歪み、隠された素質がそこに感じられはしまいか。それとも、これも単なる思ひすごしであらうか。

今日はどうよりも曇つたいかにも気をめいらせる日だ。いまこれを書いてゐる下宿の部屋の窓から、一町ほど離れた家の櫓の梢が見える。すつかり葉の落ちた枝々を曇天にさしのべた姿は、素裸かになつて繊細な神経をさらけだしてゐるかのやうだ。そして私の神経も——いや、私はこのノートを日記の代りとしてはなるまい。それでは初めの意図に反することになる。なによりも私はここ数日を慄へとほして、無理にでも古い記憶をたどらねばならない。

私の父は内科の医者で、官立の病院に勤め自宅では開業してゐなかつた。生来の無口で、愛想よく患者に対応することが生涯できなかつたといふ。母のはうは、多分に饒舌で気分が変りやすく、ときには頭痛を訴へることも少くなかつた。二人とも今はこの世にない。両親のことを語るのやはり気が重しい、先を急ぎたい気持も私を落着かせないから、ここでは簡単にこれだけの記述で留めておかうと思ふ。

私の家のすぐ横に、ある私立の脳病院があつた。高い煉瓦塀をへだてて古びた病舎の屋根が見えた。根本に気味のわるいほど毛の密生した西洋種の太い蔦が塀にからみ、私の家

の側にも厚ばつたい濃緑の葉をつけた蔓がたれさがつてゐた。葉の裏には沢山の藪蚊がひそんでゐた。まるで蔦の葉から彼等が生れてくるかのやうに、ゆすぶるとかならず幾匹もの蚊がとびだしてくるのである。どうかすると、血に脹れあがつてゐて赤黒い重たい腹に堪へきれず、ぼとりと地に落ちるのもあつた。

私の家の裏庭とは竹垣ひとつで、脳病院の院長の私宅があつた。院長の子供は私より一つ二つ年が上だつたが、私と同じやうに血色のわるいひよろりと痩せた男の子であつた。ほとんど友達とてない、また一人であるほうを好む妙にいぢけた子であつた私も、彼とだけはよく遊んだ。

ある日のこと。もう暗くなりかけたのも忘れて、私たちは魚掬ひに夢中になつてゐた。狂院の構内、隔離病棟の裏手はかなり大きな池がある。水はうすぐろく淀んで、表面に油がうき、ときどき何かのガスがぶつぶつと泥深い底のはうから浮んできた。小さな鬩魚に似た魚が放してあつて、網でやたらに掬ふと、ごく稀ではあつたが一匹二匹と捕へることが出来る。泥と一緒に、ゲンゴウなどの水生昆虫が採れることもあつた。

「うわつ、これなんだろう？」と、ふいに彼が叫び声をあげた。

馳せ寄つてみると、草の上に投げだされた網のなかに、泥や藻にまじつて、のろのろと